
リアル×バーチャル

フリーダムZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルXバーチャル

【Nコード】

N8552H

【作者名】

フリーダムZ

【あらすじ】

3000年後の日本。世界全体と結んだ、停戦協定により、世界は超高度に成長を果たした。様々な発明が生まれる中、人間はついに。アルティメットコンピューター、『サイバーブレイン』形式番号092347MXVGVを作成してしまい、実現不可能と言われた、『タイムストップ』を可能にした。そして誰もが夢みた、『危険性のない、完全なゲーム』。誰もがリアルな戦いを出来る。ゲーム中は世界は止まっているから事故すらない極めて安全ゲーム。それが発案者ディリーJマークの演説であった。「さあ！世界の皆

さん！ゲームスタート！」

あらすじ（前書き）

この世界では全てがモンスターとの戦いという、ファンタジーです。

しかし全て現実世界。

憧れた夢のような勇者の世界へどうぞ

あらすじ

3000年後の日本。

世界全体と結んだ、停戦協定により、世界は超高度に成長を果たした。

様々な発明が生まれる中、人間はついに。

アルティメットコンピューター、

『サイバーブレイン』

形式番号092347MZXVG

を作成してしまい、実現不可能と言われた、

『タイムストップ』

を可能にした。

そして誰もが夢みた、

『危険性のない、完全なゲーム』

が発生されたのだった。

『車の中だろうが、会議中でも誰もがリアルな戦いを出来る。ゲーム中は世界は止まっているから事故すらない極めて安全なゲーム』

それが発案者

ディリー」マーク

の演説であった。

「さあ！世界の皆さん！ゲームを始めましょう！！」

こうして……

始まった終わりなきゲーム。

だが人々は次第に思い始める。

エンディングを……

あらすじ（後書き）

頑張りますよーい（笑）

戦う人々

13:13

日本。

「いたか？」

少年は外を警戒する、もう1人の少年に促す。

「今はいないみたい」

「そうか……」

上で見張っていた少年が降りる。

「だけど、まさか悪魔が相手なんてね」

「いや、それはいいよ。その悪魔と一緒に前回のウルフがいるもん」

二人もバーチャルの敵を相手にしたのは、初めてではない。
慣れているため、隠れるのも得意だ。

しかし、最初に発想力を使い過ぎてしまったため、もはや武器は一回しか使えない。

このゲームでモンスターを相手にするには、人間の『創る力』

想像+発想が合わさり、初めて可能になる。

そのため、力を使うと使う度に両方の力が下がるのだ。

そうなるかとメーターである、

『エネルギーバンド』が徐々に赤くなり、武器変換、不可になってしまふ。

「お前はまだ黄色か」

「でもこのままだとゲームオーバーだね」

無邪気な笑顔で言うが、さすがにそれは嫌だ。

ゲームオーバーになれば、最低3日は復帰出来ない。
登録した際の体力によって復帰は決まっているのだ。

「ねえ」

「ダメだ」

「まだ何も言っていないよ」

「今、勝手に動いてやられたって、俺は知らないからな」

男の子は冷たくいい放つと、周囲を警戒する。

他人の心配は自分を犠牲にしかねないが、敵と一緒にならば仕方ない。

いつでも動けるようにとしなければならなかったため、座る事は許されない。

座っていたらマトになってしまふ、それは長い経験から分かることなのだ。

それに敵はどこから来るか分からない。

例えば黒い影であつたりすれば、自分の影に隠れていたりする。

「……気配を察知してよ」

「うん」

戦う人々2

今いる場所は寂れたビルのある路地裏だ。
退路は左右しかない。ビルに入りたいが、崩れてケガはしたいと思わなかった。

「右どうだ？」

「大丈夫」

二人の神経が刷り切れかけた時だった。

カラン！

近くで空き缶が転がった。

普段ならなんのことはないが、

「あっちか」

少年の内、1人が光が漏れる場所にゆっくり近付く。

「あ、危ないよ」

臆病な少年が小さく呟くが聞こえていない。
もしかしたらと思うと、寒気がする。

光が射し込む先は大通りだ。

頬を伝う冷たい汗。

小さく息を飲み、壁を背に大通りを覗いた。

そろりと覗くと、青いポリバケツの横に影が見える。

「!！」

そこにいたのは漆黒の羽を持ち、赤眼がおぞましく光る、化け物。

彼の敵、悪魔だった。

幸い気付いてはいないようで、辺りを伺っている。
今しかない！

右手に少年は青い魔法銃を構えた。

「俺の最後の一撃で倒す！」

少年は自分に言い聞かせるように言うと、力強く頷き大通りに飛び出した。

「やい悪魔！」

燃えるような赤い目が少年を捉えた瞬間、少年は引き金を引いた。

バガアン、とド派手な音で放たれた弾丸は白く輝きを放ち、悪魔に当たった。

「やった！」

悪魔を倒したと確信したが、悪魔は……

「え？消え……ない？」

少年は啞然としていた。

どんな一撃でも当たりさえすれば倒せる。

それが当たり前だった。

だからこそ少年は驚く。

魔法銃から放たれた弾丸。

間違いなく当たったのに、と。

「た、助けて——！！」

戦う人々3

同日、13:13

フランス パリ郊外

ここでも戦っている人達がいた。

男女3人で一つのチーム。

逃げまどっている内に息も絶え絶えになっていた。

「なんかやけにおおくないか？ルーカス」

金髪にサングラスの男が、もう1人の男に話かけた。

「ジョー。無駄な体力は使うな」

「ルーカスあなたもよ」

ルーカスと呼ばれた背の高い男は、金髪に白のドレス女性に釘を刺されていた。

「レイラ。君はさつき短刀を折られて逃げたばかりだ。君こそ休め」

彼らは既にボロボロだ。

3人を狙う敵、

『不死の騎士、ナーガ、アリゲーター』
とバラバラだ。

リーダー的存在のルーカスはナーガ。

サブを務めるレイラは不死の騎士。
ジヨーはアリゲーターといった具合だ。

最初は優勢であったが、ルーカスをかばったレイラは守る時に自身の短刀を折られてしまった。

チーム登録をしてはいるが、それぞれ敵を決めてかかるやり方を彼らはしてきた。

チーム登録さえしていれば、誰がどれを相手にしても良いのだが、1人だけしか目立たないのではバランスが悪い。

1人に負担が集中するのもおかしい話だ。

「ルーカス、この位置は分かるか？」

ルーカスは「ああ」と頷くとマップを開いた。

ポケットから携帯電話に似た機械を取り出すと、空中にマップが浮かび上がった。

マップを指し、ルーカスは言う。

「どうやら我々はエッフェル塔の近くだ」

「エッフェル塔？」

また随分と厄介な場所に来たものだ。
逃げ場がないに等しいじゃないか。

「じゃあここはエッフェル塔の住宅街か」
「そうみたいね」

レイラの視線を追うと、エッフェル塔の一部が見え隠れしていた。

「マップを閉じるからな」

戦う人々4

言って再度確認するなり、ルーカスはあっさりとポケットに機械をしまう。

この携帯電話みたいな機械は
プレイヤー・サポートアシストシステム
通称『PSAS』

自身のパラメーターに加え、他のプレイヤーの位置を教えたりと多種多様だ。

なんでも噂によれば、隠し機能もあるらしい。

「エッフェル塔の近くか……」

「あちらまで出たら隠れられないわね」

エッフェル塔の広場は一目につきやすい難点がある。
敵の方がルーカスやジョーより早い。

逃げ切れるのは俊敏で軽やかなレイラだけであろう。

「とりあえず動くか」

「そうね」

ジョーとレイラが歩き出していると、レイラはルーカスが来てないことに気付いた。

「ルーカス？」

レイラがルーカスに寄ろうとすると、ルーカスは手で制した。

「……残念ながらエッフェル塔に行けそうにないな」

ルーカスの確信満ちた一言に2人は首を傾げる。

ルーカスはそんな2人を見た後、フツと笑い地面に崩れ落ちた。

「ルーカス!？」

「え、やだ。冗談は止めてよ」

2人は慌てて、倒れたルーカスを揺らすのが、微動だにしない。さらに揺らすたびに赤い染みがアスファルトを染めて行く。

「なんでルーカスが?!」

「いやあああつ!」

悲痛な叫びが辺りに響いていた。

一緒にいれば恐くない。

それが3人なら尚更。

そう思ってた。ここまで来た。

けれどルーカス無しでやれる自信はない。

司令塔の彼がいたからこそ、戦えたのに。

「ルーカス——!!」

一際大きなレイラの声が響き渡った……。

「レイラ……」

ルーカスに泣きつくレイラにジョーはただ立ち尽くしかなかった。

戦う人々5

さらに同日。

13:13

アメリカ サンフランシスコ郊外。
ここでも戦いが起きていた。

野次馬が集まる中、ウェスタン風の巨体男性が挑んでいる。

「なんでだ？何故消えない！」

ショットガンを構え、男は震える。

何度も何度も当てているのに、敵が消滅しない。

現実に関与しない世界のゲーム。

それが売りであつたはず。

だが今は、住宅が破壊され、住む場所もなくなった住民が白髭の魔法使いと対峙していた。

「お、おまえは何者なんだ!？」

魔法使いに問うが、魔法使いは何も言わず、手をスツ、と伸ばす。
その手をまじまじと見ていると、中心から渦が生まれた。

「な……！？」

次第に渦が大きくなり、魔法使いの手から離れた。
離れてなおかつ、渦は巨大になり、住民に向かって突き進む。

「うわあああ！」

「な、なんだこれは！？」

「ひいいっ！」

何もなかった場所に突如、巨大な竜巻が現れ全てを飲み込む。

引き裂かれる感覚はバーチャルではない。

激痛がそれを証明していた。

悲鳴が悲鳴を呼び、次々と住民が空に消える。

「ばかなっ！？このゲームは安全じゃないのか——！」

その問いにも魔法使いは答えない。
だが男は見た。

一瞬、魔法使いが不気味に口元に笑みを浮かべるのを。

その時、男は悟った。

これは偶然ではなく、何者かが関与しているのだ、と。

「誰か……奴を」

止めて……くれ。

手遅れになる前に……！

世界恐慌

サンフランシスコの被害が現れた後、被害は尚も続いた。

被害地は、アメリカ、ドイツ、日本、フランス、イタリア、韓国、オーストラリアと世界各地に渡っていたのだ。

さすがに見過ごせなくなった公共機関も、警察や軍隊、他にも動かす。

優勢に思われたが、そこはバーチャルとの違い。
実弾兵器ではどれもこれもやられるだけだった。

このままでは危ういと、諦めずに住民としてモンスターと戦う人々。

しかしそれで消せるのも僅かに過ぎない。

あるものは精神を食われ、あるものは精神を破壊されてしまった。
10人はいないと消せないモンスター。

精神が尽きるのも無理はなかった。
連日連夜流れる放送。親類、または恋人を無くし、悲しみに暮れる人々。

これを恐れを込めて皆は『世界恐慌』と呼び出した。

外に出るのも怖くなり、誰もが街を歩かない現状。

終わりのなき悪夢の世界。

ゲームを作った会社もいつの間にか消え、どうしようもなくなった。

永遠とも思われる世界恐慌。

そんな中、日本に

『P S A S 』

の極秘機能を偶然、解いた人間がいた……。恐るべき力を秘めた

『P S A S 』

それを彼は使い方も知らず、使つてゆく。

時は1年後の

3001年、04月25日

日本。

何気なく伸ばしたゲームの世界への入り口。

壮絶な戦いが待つのを彼は知らない。

全ての住民を巻き込んだ、人々の戦いを背負った高校生。

進むうちに生まれる数々の疑問。

なぜ敵は消えなくなつたのか？

黒幕は一体どこにいるのか？

世界を舞台にした最大の戦いが始まる……

スタート

「聞いたかよ！？また被害がでたんだって」

「知ってるよ」

「俺、ヤダぜ。殺されるなんてまっぴらだ」

クラスメイト達があれこれ言い合う。

原因は今、有名なゲーム『リアルXバーチャル』だ。

安全性を考慮された非常に安全なゲーム。

それは世界各地で有名なのは知っている。

かくいう、

笹川雄揮

（ささがわゆうき）

もその1人だ。

目元まで伸びた茶髪をいじり、話に耳を傾けていた。

「ねえ雄揮。日本は大丈夫よね？」

不安そうに雄揮の背中をボールペンでつつく女の子。

彼女は

佐山観佳

（さやまみか）

雄揮の幼なじみであり、彼女だ。

クラスでは抜群に高い運動能力を持つ彼女。

インターハイ出場という輝かしい経歴も持ち合わせている自慢の彼女だ。

艶やかな髪、明るい笑顔はまさにムードメーカー。

だが、今回の件ではそんな彼女もとても怖がっていた。

昨晚も雄揮と寝たが、恐怖で寝れていない。

おかげで雄揮も寝れず、2人共が酷い顔だ。

「ねえ雄揮」

「聞いてるよ」

こつも毎日と続けば億劫になる。

怖くない訳ではないが、聞いている身にもなってもらいたいものだ。

「雄揮は冷たいね……」

「悪いね。……毎日聞かされてると頭痛くて」

「それはそう、だけど」

「それにリアルXバーチャルをリタイアしたくても出来ないんだから仕方ないだろ？」

後ろから何か言いたそうに観佳はするが、我慢した。

雄揮は心の中で謝ると、雑誌に目を向ける。

それは昔、このゲームが公開された時の取材である。
読み進めて行く内に分かったことがあった。

このゲームには

・
・
・
・
・

エンディングが存在しない

おわりがない永遠に続くゲームだと

スタート2

終わりが無ければ永久に止まらない。

確かに最近はずぐに終わるゲームが多い。

雄揮自身も、それはふつつつと感じていた。

「何考えてるの？」

「いや……ちよつとな」

エンディングが存在しなければ、つまらないだろうか。

それとも、新たな感覚として認めている？

どちらにせよ、雄揮は認めれない。

エンディングが無いなんて、今更ながら、つまらないと思っているのだ。

「……………」

雄揮は何気なく机の中を見る。

そこにはメンバープレート、

『NO・12936』

と書かれ、雄揮の顔写真がついていた。

これが、ゲームに参加してる第二の証、プレイヤープレートだ。

雄揮は10000人を越えてから登録したため、これが付いてきたのだ。

10000人以下は何故かプレートがない。

更にこのプレートが意味するものすら分からなかった。

「ねえ、雄揮」

「なんだよ？」

「こつち向いて」

言われるがまま、雄揮は後ろを向く。

「サーチカウンターが動いてるの」

「なんだって!？」

サーチカウンターとはモンスターの接近を示すものである。

青から赤に変われば、モンスターがいるのが分かるシステム。

後期型のタイプにしかついていないため、前期の人間はモンスターの接近が分からない。

いつも突然なため、混乱するのだ。

チーム登録している2人は神妙に頷くと、モンスターの登場を待った。

「油断するなよ」

観佳は頷く。

やがて教室に流れる時が止まった。

「よし」

雄揮は自分の眼を閉じ、レイピアを浮かべた。
観佳は少し大きな弓を構える。

狙いを定めていた観佳だが異変に気付いた。

「ねえ……今って時が止まってるよね？」

「あ、ああ」

観佳の言っている意味がよく分かる。

言葉で言うよりそれは視界に飛び込んできた。

「なんで……みんなが動けるんだ!？」

BATTLE

みんな参加者だろうか？

いや参加してる人間なら武器を持っているはずだ。

それに『PRAS』が2つしか起動していない事から、時間が流れているのが分かる。

つまり、リアルタイムでの戦い。

あのニュースみたいに物が破壊されるのだ。

「観佳。これは多分——」

「分かってる」

観佳は怒ったように言うと、弓を引き絞った。

同時に雄揮も剣を真っ直ぐ構える。

観佳は外を狙い、雄揮は教室の外を見張る。

「来る！」

雄揮の剣に一層、力がこもる。

観佳が叫ぶ。

「こっちにも現れたわ!」

「冷静に対処しろ。大丈夫だ。いざとなれば俺が……」
「任せて。心配はいらないから」

この日の観佳はいつになく頼もしかった。

今までなら、観佳は雄揮の後ろに隠れていただろう。

しかし今回は自ら前線に立っている。

雄揮は深呼吸すると、廊下に飛び出した。

廊下に飛び出すと、やはりいた。

「なるほど……お前が敵か」

雄揮はニヤリと笑う。

敵は黒い影を持った、魔術師であった。

強そうだ。

ちよっと手こずりそうだが、と雄揮は覚悟を決めた。

「行くぜ!」

雄揮は勇んで、左足を地面に叩きつけた。

ドン、と廊下を揺らした後、激しく切りかかる。
しかし魔術師もバカではない。

スツ、と半歩下がり、それを受け流す。

雄揮は流された剣を持ち直し、今度は払う。

だがそれすらスルリと抜けられてしまった。

「く……なんて厄介な奴！」

バトル2 雄揮

見切られているのが分かって、雄揮は更に切りかかる。

上から、下から、左右から。

とことん剣を振り回した。

しかし、そんな大振りをしていたら、すぐに力尽きてしまうのは道理。

あっという間に雄揮の体力は限界にきた。

「ハアハア……」

肩で呼吸をしつつ、汗を拭う。

拭っても拭っても滴る汗。

雄揮はとうとう剣を地面に突き刺して、もたれかかった。

スキだらけとなった雄揮に魔術師が動く。

「しまった！」

魔術師が動いたのを見て、雄揮は剣を持って隣に飛ぼうとした。がしかし、予想外なことに剣は深く埋まっていたのだ。

慌てて引き抜こうとするが、剣が抜ける気配はない。

雄揮は焦った。

それでも止まらない魔術師。

足を使って地面をゲシゲシ蹴りつつ、雄揮は剣を抜こうとする。

「この！この！」

びくともしない剣を見て、雄揮は最後に全身をバネに剣を抜きにか
かる。

ゴリゴリ、と地面が少しずつ切られて穴が広がる。

あと一息。

「このっ」

雄揮が悪戦苦闘する間に魔術師は寸前に迫る。

「抜けた！」

ズボツ、と野菜を抜いた音を立て、雄揮の剣は抜けた。
ホツとするがもう遅い。

「え？」

雄揮が見上げた先には、魔術師の右手が向けられていたのだ。

魔術師の力は波動。

放たれたら負けだ。

雄揮は剣を構えようとしたが、魔術師は左手を伸ばし、剣を吹き飛ばした。

「ち、チクショウ！」

無情なまでの攻撃は光を放ち、雄揮に波動となって放たれた……。

BATTLE 1 美佳

雄揮に放たれた魔術師の炸裂音は、観佳のいる教室まで届いていた。

「雄揮?!」

まさか雄揮が？

観佳は震えた。

勘違いだ、と思いたい。

だけど聞こえた場所は雄揮の出た、廊下から。

観佳の意識はそちらに釘付けになってしまった。

「ハッ！」

振り返った直後、敵は突進してきた。

観佳は下腹部に痛みが走るのを感じる。

だけど解せないのは窓には敵はいなかった。

ずっと弓を構えていたが、その姿は確認していない。

「う……」

ヨロヨロと観佳は立ち上がり、新しい矢を取り出して、弓を引き絞った。

以前、敵の姿は見えない。

それでも観佳はキリキリと音を立て、これ以上はないほど矢を引き絞り、狙いを定める。

「くう……っ」

先程の一撃がまだ痛む。

正直、歯を食い縛らなければ辛い。

だけど辛いのは自分だけでなく、雄揮も同じだ。

自分が根を上げる訳にはいかない！

呼吸が固定してきたと同時に、窓の遙か向こうが光った。

敵である。

「まさか……鳥類なの！？」

だとしたらあの一撃も領ける。

おそらく敵は超スピードで飛び込み、観佳に突進したのだ。

確認出来なかったのも相手が目視で捉えられなかったため。

そうと分かると、観佳は雄揮に内緒にしている

『PSAS』

のシークレット機能を使った。

実はこのシークレット機能、見つけたのは偶然だった。

たまたま裏に隠されている数字が目にとまり、紙に書き写したのが
そもそもの始まり。

しかし、何故か写した記号番号とはバラバラになってしまい、それ
を遠慮なくパスワードとして打ち込んだのだ。

するといきなり

『SECRET CODE』

と表示され、以後使えるようになったのだ。

つまりこれは観佳のうっかりが産んだ奇跡の産物。

そして、この機能は相手のパラメーターを表示する優れ物だ。

「NO・1258スカイダーね」

観佳はすぐに相手の特徴を確認する。
やはり相手は超高速を得意とするらしい。

BATTLE 2 美佳

「よし」

観佳は急いで窓へ駆け寄り、構える。

敵が光を放つならば、もう一度光るはずだ。

光が出た瞬間を狙えば、敵を定めるには充分と考えての行動だった。

しかし、敵は感ずいたのか一向に近寄る気配がない。

弓をばか正直に構えていれば誰も寄らないだろう。

「やっぱり気のせい？」

いや、違う。

空だけから来るとは限らない。

もしかしたら下から来るかもしれないのだ。

観佳はまるで小動物のように、空と地面の両方を確認する。

はたから見たらさぞかし奇妙な光景だろう。

観佳が疲れて、油断した時だった。

突然、北の空が光ったのだ。

「見つけた！」

弓に矢をかけ、一気に光に向けて飛ばす。

一本、また一本と徐々に観佳の動きが速くなる。

最初、光に届かず、手前で減速しては落ちて行く。

それでも美佳は諦めない。

前を見据えて、少し間を開く。

もし。

自分が思った通りなら、敵は更に加速をしてくるだろう。

飛行モンスターなら、必ず羽を守り、矢を何らかして防ぐ。
不安は残るが、これしかない。

美佳はグツとこらえて機会を伺った。

「来た！」

祈りが通じたか分からないが、敵の姿を遂に捉えた。

鳥類モンスター、フェイントバードだ。

「速い！」

観佳が驚いたと同時に

【P S A S】

が詳しい情報を映し出す。

その内容とはバードフェイントは超空攻撃を得意とする、モンスターらしい。

観佳は一気に読み込み、敵の弱点に到達した。

バードフェイントの弱点。

それは――

「隠れた右目……？」

BATTLE3 観佳

P S A Sにはそう書かれているが、肉眼では敵が離れていて見えな
い。

まだシルエットでしか確認出来ないのだ。

P S A Sが自動的に働き、モンスターの正式名を映す。

【N O・1258
スカイダー・フェイントバード】

【厚い体毛に覆われ、自分の弱点となる右目を普段は隠す。

敵に突進する手前のみ、右目を覗かせる】

「なんて面倒な相手なの……」

説明を見た瞬間から力が抜ける。

厄介な相手に変わりなかった。

しかも先程のような突進の時だけがチャンスなど、無理難題だ。

あの低空飛行の速度は肉眼で捉えるのは不可能。

美佳は弓を構えたまま、足を半歩後ろに下がる。

そのまま下がろうとしたが、下げた足のポケットに当たったのか、

何かが地面に落ちた。

「あ……」

落ちた物には美佳自身が映っていた。

コンパクトミラーだ。

どうやら落ちた際にボタンに当たったらしく、そのまま開いたようだ。

美佳が弓を杖変わりにして、ゆっくり屈んでコンパクトミラーに近づく。

「う……まぶしい！」

上からでは分からなかったが、近付いた途端、ミラーが光ったのだ。一瞬、観佳は怯んだがよく見ると、ミラーは太陽光によって、反射していた。

直接、光を食らっては目が数秒間開かない。

観佳は右目を伏せつつ、コンパクトミラーを拾おうとした。

数センチまで迫った時、その手を止め、観佳は考える。

「直射日光……もしかしたら使えるかも！」

観佳はコンパクトミラーを閉じ、左手に持ち変えた。

「私の考えが正しければ、このミラーが勝機を生むはず！」

BATTLE 4 観佳

観佳はコンパクトミラーをいつでも使えるように構える。

先程、自分が食らってみて分かった。

直射日光の秘められた破壊力。

例え数秒間だとしても、目眩ましになる。

しかも相手は目が弱点の鳥だ。

片方の目が使えなくなれば、弱点をさらけ出すに違いない。

まだ矢が届かない位置から狙ってくるなら、相手の初動作を見切れ
ばいいのだ。

そこまで分かって観佳は自己嫌悪する。

もっと早く分ければ勝てた、と。

「雄揮……」

もっと早く気付いていれば、雄揮を助けてあげたのに。

どうして自分は肝心な時に限って遅いのだろう。

今だ煙の上がる廊下を見て、観佳はばやいた。

観佳が廊下に気を取られているスキに、フェイントバードが突進の
構えに切り替わる。

先程と違うのは、フェイントバード自体が高く遠い位置から狙って

いること。

確実に仕留めようとしていた。

キシエエエ！！

「あ！」

フェイントバードが鳴き声を上げた。

ハッとなり、観佳は矢を素早く構えようとする。

しかしコンパクトミラーが邪魔で、左手が使えない。

ミラーを捨てればいいが、今度は相手の弱点を狙えない。

「うう……」

怒りを目に変えたような恐怖の目が観佳を捉える。

フェイントバードは大きく羽を広げ、槍のように観佳に向かってきた。

しかし相手に恐怖を感じた観佳は動けない。

観佳は自分でも分からない内に、ミラーを開いてしまった。

「あっ……！！」

気付くと同時にミラーが開く。

尚も迫るフェイントバード。

観佳はゆっくりと教室の中に消えようとした。

だがやはりフェイントバードの方が早い。

観佳との距離はほとんどない。

あるとすれば、窓が阻んでいるだけだ。

観佳は一か八か、左手を盾にして逃れるようにする。

ギエエエエー！！

「え？なにどうしたの？」

フェイントバードは何故か苦しんでいる。

左目を覆い、叫びを上げた。

ミラーには太陽光を反射させていない。

では何に苦しんでいるのだろうか。

BATTLE5 敵の猛追 観佳

空中で苦しそうに蠢くフェイントバード。
弱点である右目を今なら狙えそうだ。

だが観佳は未だに動けない。
なぜ苦しそうにしているのか、という理由を求めていた。

「分からない……」

やはり解せない。

コンパクトミラーに太陽は反射しなかった。
ここが教室じゃなければ、周りにある何かだと分かるだろうに。

考えても答えは出ない。

観佳はコンパクトミラーを閉じてみた。

「あ……なんだろうあれ？光ってる？」

ちょうど、コンパクトミラーの真下にそれはあった。

「これって……」

落ちていたのは何かの破片だった。

数日前に教室で授業に使った刃物の破片だ。

これに太陽光が反射したのだろう。

なんてことない偶然が重なって観佳は助かったのだ。

「よし、行くわよ！」

トリックが判明した途端、フェイントバードが動いた。

しかしそれよりも早く観佳が動く。

フェイントバードの爪が観佳をかすめ、衣服に爪痕を残した。
やはり近距離から狙うのは危険だ。

観佳は教壇まで突っ走る。

それを見たフェイントバードが窓から飛び込んできた。

「もう……あと少しなのに！」

真っ直ぐに迫るフェイントバードを寸前で躲す。

体勢の整わないまま躲したため、弓を構えるに至らない。

「当てさえすれば」

間違いない勝てるのに……。

それは遙かに叶わない。

敵は更に速度を上げ、観佳は躲す。

敵はそのまま窓際にあつた、ピアノにぶつかった。

「痛っ！」

肌に当たった糸より頑丈な線。

よく見るとそれはピアノ線だった。

もしかと思い、ピアノを見るとピアノは案の定、大破している。

「ピアノ線……」

指でクリクリ回し、引っ張ったり弾いてみる。

なかなか頑丈ならしく、切れそうにない。

もし、これを使えたら……。

「あれ？私、思いついたかも……！」

BATTLE 6 観佳 必殺の一撃

観佳は閃いた。

今使用している弓の弦をピアノ線に変えてはどうだろう。

速射率が上がり、僅かなタイミングで打てるのではないだろうか。

元々、弓の弦は切れにくく、頑丈である。

しかしピアノ線の頑丈さはしなやかな上、弾く速度も全く違う。

恐らく今より速い、『速射』は可能だ。

観佳は素早い動作で、

『PSAS』

の『武器』を選ぶ。

『PSAS』には

姿、形は変わらないが、物質のデータを使い、より頑丈に強く出来るシステムがある。

例えば最初は銅で出来た短剣があるでしょう。

そこに鉄パイプなどのデータを入力すれば、すぐさま短剣は『鉄の短剣』に生まれ変わるのだ。

しかも重さは変わらないため、扱いも全く変わらない。

加えられたのは『武器』の強度だけである。

観佳の場合は『弓』のため、変えられるのは、

『矢』『弓』『弦』の3種類だ。

そうこうしている内に観佳の弦が変わる。

「うん。これなら……」

前より気持ち軽い。

間違いなく『速射』は可能だ。

試しに観佳は一撃だけ放つ。

速いのも想定していたが、想定外のこと起きる。

パシユン！

「えっ？」

観佳が驚くのも無理はない。

軽く矢を引つ張っただけの一撃。

それでも矢の速さが異常なのだ。

まるで弾丸のような速さ。

しかもその一撃は相手を貫通してしまい、フェイントバードは地面に倒れる。

「……………」

唖然とする観佳の前でフェイントバードの姿は灰になって消えた。
呆気ない。

あまりにも呆気なく、観佳は戦いに勝った。

だが、それはピアノ線の強力な弾力があつたからだが。

白煙の廊下

フェイントバードが消えた後、観佳は廊下が気になって仕方なかった。

恐らく、教室の外では雄揮が戦いを繰り広げていることだろう。

自分とは違い、雄揮は強い。

初めてゲームした時も、自分を囷に敵を倒したのは圧巻された。

、防御の面において防御は弱いが、攻撃は計り知れない。

古いタイプの

『PSAS』

なのにその力は新型よりも強く思う。

敵に関する情報もなしに、雄揮は毎回戦ってきたのだ。

けど、観佳は今回だけは不安だった。

廊下で戦っているハズの雄揮が放つ、騒音が聞こえないのだ。

依然として廊下は白煙を上げたまま、静寂と化している。

「まさか……雄揮？」

嫌な予感が徐々に大きくなる。
気の迷いだと思いたい。
そんな現実はないと。

だが現実はずぐにやってきた。

観佳が廊下を見た時に。

「雄揮！！？」

観佳に衝撃が走る。

あれほど強いハズの雄揮が白煙の中にいる。

ピクリとも動かず、横たわったまま。

「雄揮！！」

観佳が駆け出そうとした瞬間、何者かが立ちはだかった。

「何よアンタ！」

観佳の問いかけに答えはない。
観佳の前に立ちはだかったのは雄揮が相手していた、あの魔法使いだ。

魔法使いが例の右手を光らせる。

「雄揮——！！」

観佳は叫び、辺りは光を放つ。

再び濃い白煙に廊下が包まれると、観佳の隣にもう一人の人影が。

自分の剣を盾がわりにして、観佳を庇ったのだ。

「……待てよ。お前の相手は俺だ」

「雄揮！！」

雄揮は生きていた。

観佳の叫びが聞こえた瞬間、彼の意識は戻ったのだ。

「悪いな待たせて」

「うつん……えへへ」

雄揮は観佳に優しく笑みを浮かべる。

雄揮は「だけどな」と続く。

「もう心配いらねえよ」

BATTLE second 魔法使い

雄揮は立ち上がり、剣を握る。

観佳を守るように立ち、殺意を込めて魔法使いを見ていた。

魔法使いはそんな威嚇すら効いていないらしく、右手に光を集める。

「観佳」

「はい」

「お前は下がってろ」

「でも……」

「いくら俺でもお前を守りながら戦えない。それにアイツの魔法は結構、威力あるからな」

先程食らって分かったが、破壊力は相当なものだ。

一時的な油断とはいえ、危うく殺されかけた。

手加減とかするにはハンデがありすぎる。

しかも観佳を守っての戦いなど不可能だ。

勝つにはこちらが全力。

他は考えつかない。

「早く！」

「う、うん！」

雄揮のただならぬ気迫に後押しされ、観佳は後退する。

観佳に被害が及ばないことを確認すると、雄揮は剣先を地面に突き刺した。

「いくぜ……喰らえっ！『爆裂列波』
(ばくれつれっぱ)」

剣先に精神力を流し込み、高速の地割れが地表を割るよう魔法使いに迫る。

この『爆裂列波』は
リーチも遠距離と長く、ほとんど魔法と同じ原理だ。

ただ『爆裂列波』等の技を使うには、魔法の資質がなければならなかったため、戦士には使用出来ない。

つまり雄揮は戦士は戦士でも
『魔法戦士』
となるのである。

「いけ——！」

凄まじい轟音と共に、爆裂列波が魔法使いを吹き飛ばした。

あっさり姿勢を直し、魔法使いは構える。

「ほう……人間にしてはやるな……」

「なっ……!？」

「じゃ、喋った!??」

雄揮と観佳に衝撃が走る。

プログラムが喋ったというのは今までなかった。
それもそのはず。

『プログラムは喋らない』
そう決まっていたのだ。

喋るプログラムを見て、雄揮は更に強ばる。

「さて……本気でいくかな」

BATTLE second 観佳の怒り

魔法使いは今まで着ていたローブを取り、正体を現した。

漆黒。

全体が黒く覆われ、顔すら見えない。

「解るかな？この力が」

「く……っ！」

色々な敵を相手にしてきたが、こんな凄まじいプレッシャーは初めてだ。

勝てるわけがない。

今の自分では全然。

雄揮は剣を地面から引き抜くと、胸元に構えた。

だがどうしても恐怖を拭えない。

嫌な冷たく冷えた汗が背中に張り付く。

威圧感が、空気が、徐々に雄揮を締め付ける。

体が重く、剣まで重圧で握りたくないぐらい。

「>一条の風よ、集え。数多なる刃となり、切り刻まん！<
『風の風牙』

【ウィンド・シュラサード】」

魔法使いが呪文を唱えると、周りのガラスが一斉に弾き割れ、無数の刃が雄揮を襲いかかる。

一陣は辛うじて躲すが、髪を斬られ、足も傷を受けた。

「まだまだ！」

魔法使いが正面に合わせた両手を頭上に掲げ、右手を降り下ろす。

すると、刃が全て真上にあがり、半数が降り注いだ。

「ぐうううっ！！」

剣で受けても限界はある。

相手の魔法は重いときたら、受け流すにしても剣の強度は知れたものの。

雄揮も薄々感じていた。

「あっ……」

パキィィン……！

刀芯が真つ二つに割れ、雄揮は頭上を見上げる。

終わった……。

雄揮にもう、なすすべはない。

雄揮は力なく立ち尽くしていた。

「雄揮——！！」

観佳が叫び、光が刃を撃ち抜いた。

「観佳……？」

見ると観佳が弓を構え放つ姿だった。

観佳は涙を浮かべ、矢を放つ。

「やああああっ！」

観佳は風の刃を射ち落とし、数を減らしていく。
これにはさすがの雄揮もたじろんでしまった。

「やるな……人間が呪文に齒向かうとは」

魔法使いはニヤリと含み笑いをしている。

「雄揮はやらせない！絶対に！！」

BATTLE second 観佳の実力

観佳は必死だった。

自分がどうなるうが構わない！
だけど雄揮だけは守りたい。

それが強く現れ、観佳の矢は先程以上に強くなっていた。

「ぬう……こしゃくな真似を」

イラついたように魔法使いも風の刃を雄揮に定める。
決して止まらない観佳の連射。
魔法使いは更に速度を上げる。

「あああああつつつ……！！」

「ぬううううつつ！」

もはや人間技ではない。

観佳の力は既に音速に近付いている。
魔法使いも焦りを感じつつあった。

「すげえ……」

真上で繰り広げられる高速の戦い。

刃が降る寸前を矢が抜け、掻き消している。

雄揮に一切当たらず、雄揮は観佳を見た。

必死に、ひたすら必死にそれは現れている。

汗も脱水寸前なのに止まらない。

雄揮は自分に問う。

なんとか観佳を助けてやれないかと。

「この、いい加減につつ」

「また上がった!？」

魔法使いの速度に際限はないのだろうか？

あれほど必死な観佳よりまだ早い。

しかし観佳は諦めていなかった。

雄揮は不思議に思い、観佳の弓を見る。

なにも変わらないはずなのに、強度が、威力が違う。

雄揮は決死の思いで、観佳に向かって跳んだ。

「雄揮!？」

「観佳!お前、なにしたらそんなに強くなった?」

観佳は矢を放ちながら、腕を指す。
小さな声で「武器の強度」とだけ言った。

雄揮は魔法使いに見えないぐらい、小さく頷き、
『PSAS』
を再起動させた。

「そうか……これが」

『武器』の欄を調べ、雄揮は『強度』を選択する。

「え」と、『武器の強度となるデータを右手に持ってください』？

雄揮は周りをみるが、何もない。

BATTLE second 雄揮、疾走。探せ！武器素材！！

観佳に話かけたいが、それも出来ない。

雄揮は1人、考える。

折れにくく、伸びる剣。

それが雄揮が望む形だった。

マンガならすぐに手に出来るが、これは現実。

そんな便利なモノがあるはずない。

一度、そう結論付けようとしたが、雄揮は頭を振る。

「あつたはずだ。あれが……」

アレさえあれば、かなり強力な剣になる。

だがアレは学校で使う場所がない。

主に学校とは無関係な場所で使うのだ。

雄揮は記憶をたどり、ある場所に行き着く。

「あつた……そうか、あそこならあるぞ！」

雄揮は観佳に背を向け、一気に走り出す。

向かう場所は一階。

普段、生徒が立ち寄らない場所だった。

「ここならっ！」

雄揮は引き戸を開く。

そこは全生徒が立ち寄らない聖域、

『校長室』だった。

雄揮は高校の記録、優勝旗などの飾られた棚を開く。

昔、一度だが見た覚えがあるのを思い出したのだ。

「あつた……」

まさかとは思ったが置き忘れにして、ソレはあつた。
光り輝く銀色のソレ。

しかし雄揮が必要なのはソレの先端だ。

雄揮は謎の金属を掴むと、扉を閉めようとした。

扉が閉まる寸前、雄揮は更に気付く。

「まさか……アレは？」

長い棒が雄揮の目に止まる。

もしかしたらアレかもしれない。

優勝旗を退かし、雄揮はそれにソーツと手を伸ばす。

「これ……だ。これさえあれば！」

現時点で最強の剣になる。

雄揮は2つを大事に抱え、観佳の元へ急いだ。

「待ってるよ、観佳！今行くからな！！」

BATTLE second お前だけでは

雄揮が観佳の元へ急ぐ中、観佳と魔法使いの戦いは熾烈を極める。

互いに威力といい、動作などはほぼ互角。

息も絶え絶えになる頃には、2人の動きは停止していた。

「な、なかなかやるな。人間にしては」

「じ、自分でも驚いてるわよ」

自分でもここまでやれるなんて思わなかった。
新しくした矢は魔法使いに引けをとらない。

「いくら抑えているとはいえ、私の30%に食らい付くとは」

「……え？全力じゃなかったの？」

「我が人間相手に本気になるものか」

随分と人間を毛嫌いしているようだ。

でも30%なんてバケモノとしか思えない。

少なくとも、自分は全力だった。

それを越えられては、自分に勝ち目は皆無。

観佳が絶望していると、魔法使いが動く。

息切れしている場合ではない。

観佳も再び矢を構える。

勝てなくても立ち向かわなければ。

もはや意地でしかなかった。

「> 緑の地より現れ、さざ波のごとき緩やかさを持ちし風よ。立ち
はだかりし者を裂け！

『疾風』

ソル・ウィンド」

「キャア！」

魔法使いが唱えた『疾風』は恐ろしく速かった。

矢を構え、すぐに射てる体勢だったのに、捉えることすら叶わなかったのだ。

「これで終わりだと思つな。喰らえ！」

魔法使いの猛攻は留まることを知らない。

『疾風』は次々に生まれ、観佳を刻む。

圧倒的な力に観佳はボロボロだった。

「とどめだ」

魔法使いが右手を伸ばし、膨大な渦が生まれてゆく。
観佳はもう、どうすることも出来ない。
自分では勝てないんだ。

観佳は肌で実感していた。
でもせめて、雄揮に……。

雄揮に挨拶したかった……。

魔法使いの右手、渦が大きくなり、観佳は腰から落ちた時、

「バカ野郎。お前だけ逝かせるかよ」

続き様に魔法使いに何かが飛ぶ。

魔法使いが躲した後、ソレは地面に突き刺さった。

「これは折れた剣!？」

「待たせたな」

雄揮はいつの間にか戻ってきていた。
そのまま観佳を抱え、一度離れる。

「き、消えただと？くそ！そんなハズは……!」

BATTLE second 奇蹟の発見

「ここなら大丈夫かな？」

魔法使いが辺りを探している間に、雄揮と観佳は屋上に移動していた。

半ば強引なやり方だったが、観佳の武器はもう数が少ない。

あのまま戦っていても負けるのは目に見えていたのだ。

雄揮は全てを視野に入れ、このような行動に移った。

もちろんそれだけではないのだが。

「観佳、大丈夫か？」

「な……なんとか」

「悪い……コイツの使い方が解らなくてな」

雄揮はP S A Sを見せる。

「『武器強度変換』は解るけど、どうしたらいいか解らなくてな」

雄揮は観佳の前で『武器強度変換』を選ぶ。

だが何度やってもエラーになってしまっ

「それ、コードを入れないと」

「コード？」

「ひょっとしてコードを知らないの？」

雄揮は頭をかしげる。

コードが無ければ、強度変換は不可能だ。

観佳は自分のコードを知っていたから、出来たが、雄揮は覚えていない。

観佳は「ちょっと貸して」と言うと、雄揮のP S A Sを動かす。

『コード入力してください』と出るが、

「……ダメ。やっぱりコードがないと」

焦る雄揮は「やってみる」と再び、P S A Sを動かす。

頭に浮かぶ数字、好きな数字を入力してみるが無駄だった。

「えーい!!」

「あ、そんなことしたら壊れる!!」

雄揮がとうとうやけくそになり、観佳が慌てて止める。

観佳の健闘虚しく、雄揮はメチャクチャなコードを入力してしまった。

落胆する観佳は絶望視してしまう。

あんなメチャクチャなコードが存在するはずがない。

ため息をつき、泣きたい気分だった。

「あれ？なんだこれ？」

雄揮は不思議そうな声を出す。

P S A S にはこう書かれていた。

「『シークレットコード確認』……？『シークレット機能を解除します』？」

「シークレットコード？」

観佳がゆっくりと雄揮の P S A S を見る。

そこには観佳の見た事がない項目がズラリと並んでいた。

壊れた、観佳はそう思い、顔を伏せるが、雄揮は1つの項目を開いてみる。

武器強度変換を。

「じゃあ……」

BATTLE second 先手は魔法使い

それは信じられない事だった。

雄揮が武器強度変換を選ぶと、なんと1～9まで変換可能だったのだ。

観佳の武器強度変換は1～4。

雄揮はとんでもない数の変換が可能になっていたのだった。

まさに最高の変換を可能にするものだ。

雄揮はP S A Sを片手にニヤリと笑みを浮かべる。

「雄揮……どうしたの？」

「観佳……俺は天才かもしれない」

観佳が怪訝そうにする。

その時だった。

「うわぁ！」

「キャア！？」

突然、自分達のいる場所の前方に大きな爆発が起きた。

白煙に包まれているが、微かに見える穴は自然に起きたものではない。

雄揮は観佳を守るように立ちはだかった。

「やっと見つけたぞ」

白煙からゆっくり伸びる黒き布。

漆黒に包まれた魔法使いが、ジワリジワリ、と歩を進めてきた。

「雄揮！退いて！」

観佳はなりふり構わず、矢を放つ。

近距離にいた雄揮の頬をかすめ、矢は魔法使いに飛んだ。

当たる寸前、マントに弾かれたが。

「あ……」

「観佳！？」

カラン、と観佳の弓が地面に転がる。

先程まではこれで対抗出来た。

勝てる自信もあったのだ。

けれど今度は矢を弾かれた。

この時点で観佳は敗けを悟ったのだ。

「人間にしては手こずったよ。だけどそれも終わり。潔く消えるがいい」

魔法使いは両手を組むと、再び呪文を唱え始めた。
今度こそ逃げ場はない。

観佳は諦めたようにうなだれる。

「まだ、負けてねえよ。観佳、諦めんな」

雄揮は観佳を励まし、両手に何かを握る。

「死に損ないめが。まだ諦めてなかったか」

「悪いな。諦めるには足りないんだよ」

「足りないだと？」

「お前みたいな弱い奴じゃ恐怖がな」

「面白い！」

魔法使いが更に魔力を高める。

「ならば喰らえ！『ブレイクホール』」

「うお！？？」

魔法使いの魔法が雄揮のいる地面を割り、雄揮は観佳を庇いながら下に落ちた。

BATTLE second 雄揮の見つけた武器の正体

「あの野郎、なりふり構わずかよ」

穴の空いた先を睨み、雄揮は舌打ちした。
腕の中に収まった観佳が身動きをする。

「雄揮……痛い」

「あつ悪い」

雄揮はパツと手を放す。

いきなりだったため、観佳のストック矢が見えてしまう。

「お前……それで全部か？」

「うん……」

雄揮が背中を指すと、観佳は小さく頷いた。

矢はあと一本だけ。

とてもじゃないが観佳に負担をかける訳にはいかない状況だ。

雄揮は決断を迫られた。

「……………」

雄揮は葛藤を繰り返す。

観佳を守りながら戦うべきか、それとも、観佳に離れてもらうべきか悩む。

しばらく頭を悩ませていたが、やはり答えはなかった。

「雄揮！」

「ちっ！」

舌打ちすると、観佳を抱えて、真横に跳ぶ。

跳んだあとには大きなコンクリートの塊が突き刺さっていた。

さすがにこれはマズイ。

当たっていたら致命傷は免れなかったであろう大きさだった。

雄揮も肝を冷やしている。

「避けたか……………」

いつの間にか魔法使いは下に来ていた。

となると、先程の塊は魔法で崩したのだろう。

本当に危ないところだった、と雄揮はようやく実感していた。

だが、このままでは変換する間もない。
もう時間はないのだ。

雄揮はついに2つの武器を構えた。

「ん？なんだそれは？」

雄揮は自信満々に「こいつはな」と告げる。

「お前に勝つ、最高の武器だ」

「ほほう……」

魔法使いが怪しく揺れる前で、雄揮はP S A Sを高速起動させる。

本当はもう少し時間を稼いで魔力を減らしたかったが、仕方がない。

「右手に伸縮の特性を持つ武器。左手に強度」

雄揮が持つ武器は、それ自体では役に立たないものもある。

後ろに隠れていた観佳は、ソレに驚きを隠せない。

「あれ……ゴルフクラブと、釣竿??」

そう。

雄揮が見つけたのは、校長自慢のゴルフクラブと、特注品の釣竿だ。
観佳は戸惑う。

あんなアイテム、強度に使って何をするのか解らないからだ。

「完成だ……」

雄揮は思わず剣を眺める。

光り輝く刀芯。

黒き装飾に長い紐のような物が2つ伸びている。

「さあて、始めようぜ。第2ラウンドをよー！」
「よかるう……来るがよいー！」

BATTLE second 魔法使いVS雄揮

魔法使いが手のひらに力を集める。

凄まじい魔力だが、雄揮は恐がらない。

小さく深呼吸すると、剣を地面に突き刺した。

「伸びろ！」

「なにっ！」

剣が魔法使いに向かって伸び、雄揮は柄をにぎったままだ。

素早く伸びた剣を元に戻し、魔法使いに切りかかる。

「ハアアアッ！」

「ぐう……！」

数ミリの所で、魔法使いは杖で受ける。

雄揮はまだ止まらない。

剣をスライドさせ、杖を切っ先が走る。

当たるように思った。

しかし、相手は強力な魔法使いだ。

寸前で見切られ、雄揮は体勢を崩してしまった。

「邪魔だ」

「この……」

魔法使いは右手に溜めた魔力を解き放つ。

波動が放たれ、雄揮に向かう。
避ける術はない。

魔法使いは油断していた。

「なんの……っ ウラァッ!!」

だが雄揮は地面を蹴りつけ、遠く後退すると、波動を剣で受け、
合いで弾き飛ばした。

ズド——ン!!

校舎の壁が崩れ、雄揮は白煙に包まれる。

魔法使いには見えないが雄揮はハッキリと相手を見えていた。

「喰らえ!」

「!」

白煙から伸びる銀の刃。

魔法使いはあまりに咄嗟のため、身動きが出来ない。

だが身体が反応し、再び杖で切っ先を受け止めた。

止まった切っ先が振動となり、雄揮は止められと知っている。

「巻き付け!!」

「な……なんだこれは!？」

杖に受け止められた剣は、切っ先から弾けるように割れ、魔法使いに巻き付いた。

巻き付いたのを確認すると、雄揮は天井を駆けるように、魔法使いに飛び込んだ。

「元の長さになれ!」

魔法使いが見えた時、雄揮は魔法使いを剣に巻き付けたまま、剣の縮めた。

これによって雄揮は急激に加速。

再び魔法使いの背後にピッタリくっついた。

BATTLE second 雄揮と観佳の作戦

「く……貴様！」

「どうした？動けない恐怖はないか？」

ピッタリ背中に立っているため、魔法使いは身動き不能だ。

観佳は啞然としていた。

「観佳！今だ！撃ち抜け！」

「そうは……！」

魔法使いが観佳に手を伸ばす。

雄揮は剣の柄をクルリと回した。

「ぬぐ……ぐ」

巻き付いた剣が更に魔法使いを縛る。

「観佳！何をしているんだ！？お前が撃ち抜くんだ！！」

再び雄揮が怒鳴る。

この魔法使いに勝つにはこれしかない！

観佳は痛みをこらえ、地面から立ち上がろうとする。

「あ……」

ドサッ。

観佳に立ち上がる力はもう残っていなかった。
雄揮が想いを込めて、観佳を応援する。

立ち上がれ。

もう一度でいいから。

しかし無情にも観佳は立てない。

観佳は地面に拳を叩きつけて涙を流す。

やはり自分が足手まといになる。

そんなの嫌なのに！

どうして言うこと聞いてくれないの！

観佳は何度も地面を叩き、悔しさを露にする。

「観佳……」

これまでなのか！？

ここで死ぬしかないのか！？

雄揮は拳を握り震える。

何かないのかと。

絶望する2人に雄揮があるものに目を止めた。

「あれは……？」

それはキラリと光る、観佳の弓だった。

そして更に雄揮は気付く。

弓の前に小さなくぼみが出来ているのを。

「観佳！そのくぼみに弓を突き立てるんだ！」

「！」

「それなら踏ん張らなくても放てる！」

観佳は最後の力を振り絞り、手を伸ばす。
弓を右手に握りしめ、

「あああああっ！」

力強く弓をくぼみに差し込んだ！

自分の身体を足で回転させ、遠心力でストック矢を背中から外に取り出した。

そのままつつ伏せになり、歯を巧みに使い、弓を引き縛る。

「いけ——！！！」

パシユキュン!!

BATTLE second 雄揮のファインプレー

観佳が放った矢はこれまでのどれよりも速い。

瞬速の矢と化していた。

「やべー……」

思わず雄揮も呟いてしまう。

自分の予想より遥かに速い。

魔法使いに当たるのは間違いないが、これでは自分にも当たってしまう。

かといって、ここから動けば、魔法使いの拘束は解けてしまい、矢は無駄になる。

雄揮は飛んでくる矢を避けるしかなかった。

「フフフ……」

魔法使いは笑っている。

雄揮は背後を睨んだ。

「誤算だったようだな。私には勝てても、貴様も巻き添え喰らうのだから」

「……………」

雄揮は睨むしか方法がなかった。
そう。

自分のミスだ。

観佳の矢がここまで速いなど、予想外だった。

矢は徐々に雄揮に迫る。

出来るだけ引き付け、避けよう。

それがどんなに難しいか、雄揮は思い知っていた。

「私の勝ちだ。残念だったようだな」

「黙れ！まだ諦めてねえんだよ！」

雄揮は頭をフルに働かせ、解決法を導く。

矢は避けなくてはならない。

だけど、避ける方法がないのだ。

雄揮は剣を見る。

握ったままにしなければ、拘束を解く事に繋がってしまう。

「なんだ？この紐？」

雄揮は剣に繋がる紐を引っ張ってみる。

なかなか頑丈だ。

雄揮は決断した。

「フハハハ。私に勝てるはずがないのだ愚かな人間め」
「……それは」

雄揮が天井を見上げ、ニヤリとする。

天井には運のいいことにフックが付いていた。

恐らく、電灯がついていただろう。

戦闘の影響で外れてしまっていた。

あの場所にこの紐を掛けたら、避けられる。

「フフ……さすがに気が動転したか？」

雄揮は「いや違うな」と不敵に言い、紐を天井に投げた。

「あばよ」

ヒュン！

「何っ！？ うおおおッッッ！！？」

雄揮が真上に上がった瞬間、観佳が放った矢は魔法使いを貫いた。

BATTLE second 終局

雄揮はぶら下がったまま、魔法使いを眺める。

「ふう……危ねえ危ねえ」

真下にいる魔法使いに刺さった矢は、自分のいた場所でもある。

あの場で浮かばなかったら、撃ち抜かれている所だった。

寸前までは良かったが、まさに紙一重だ。

「バカな……私が人間に負けるだ！？」

突き刺さった矢を見ながら、魔法使いは信じられない心境だった。

全力には及ばないにしろ、人間に遅れをとることすらなかった。

それがこんな少年、少女になんて……。

「俺たちの勝ちだな」

雄揮は天井から離れると、綺麗な着地を決めた。

そのまま剣を突き付ける。

「フフ……みくびっていたわい。だが……」

魔法使いは自分の煙幕弾を使う。

「うわっ？」

真っ白に包まれ、雄揮は腕を盾にして目を閉じてしまった。

数秒後、雄揮が魔法使いを見ると、姿はなかった。

「しまった！」

煙幕弾に気付いた雄揮は慌てて辺りを探す。

>また会おう。くれぐれも殺されないようにな。フハハハハ……<

何処からともなく、魔法使いは笑い声を上げ、消えていった……。

「ち……なんでだ？」

雄揮は今気付いた。

魔法使いは間違いなく、致命傷を受けたはずだ。

それなのに消えなかった。

そしてこの惨事。

窓ガラスは全て割れ、校舎は半壊している。

いざ目にとると、これがゲームでないと、改めて実感した。

この状態で学校が再開することはないだろう。

みんなへの誓い

「は……っ!？」

「起きたか観佳」

「雄揮……?」

崩れた校舎を背に観佳が身をよじる。

「痛ッ!」

観佳が眉根を寄せると、指からツーンと血が伝った。

「お前、無理しすぎだよ」

雄揮は観佳に優しく、右手の人差し指に絆創膏を巻いてあげる。

あんな高速連射したら当然だった。

観佳の知らない内に、身体が悲鳴を上げていたのだ。

いくらゲームでも限界はある。

それを思い知らされた。

「無理するなって言っただろ？」

「だって……」

観佳は心配だったのだ。

あの時、魔法使いにやられた雄揮を見た時、張り裂けそうになった。自分が助けてもらっていたため、そのショックは計り知れない。

さらに言えば、雄揮の剣は折れてしまった。

無理する条件としては、揃い過ぎているぐらいだ。

観佳が必死になるのも道理でしかない。

「とにかくアイツは逃げたけど、お前が無事で良かった」

戦いが終わった時、倒れている観佳に雄揮は真っ青になった。

抱き起こすと観佳は顔面蒼白。

雄揮も我を忘れそうになるぐらいだった。

だけど今、観佳がいる。

「約束したよな？お前は俺が守るって」

「うん……」

「だから任せろ。俺が守る何があるうともな」

崩れた校舎で雄揮は決意を固める。

戦いの最中も気付いていた。

動ける人達の存在。

悲鳴も聞こえない中、彼らは校舎に埋まってしまった。

おそらく、彼らは時間が動いた瞬間、助からないだろう。

だからその分、誓う。

観佳を守ってやると――

P S A S に隠された力

翌日。

雄揮は観佳と共に、

【P S A S】

ついて話をしていた。

様々な話をしていると、シークレットコードの話題になった。

「じゃあ、観佳もシークレットコードを知ってたのか？」

「うん。だけどシークレットコード違いみたい」

「と言うと？」

「私の場合、シークレットコードを使って追加されたのは、敵の属性や弱点なの。武器強化もそんなに多く選べないし」

「なるほど」

作りが違ったかと思ったが違うようだ。

シークレットコード。

これが何なのかさっぱり不明だ。

「とりあえず調べてみるか」

「そうだね」

雄揮は【P S A S】を起動させる。

まずは一番上の武器強化を選んだ。

「やっぱり9種類あるな」

「私の中でも5種類だよ？」

「分からないな。次は……」

雄揮は次に下の段のアビリティーを調べる。

「肉体強化、身体強化、反射神経強化……めちゃくちゃあるな」

「私の方は今言った3つだよ」

ゲームに反映される上限を遥かに越えている。

当初の数値よりかなり高い。

およそ、5倍だ。

観佳も初期より高く、3倍まで伸びていた。

「次は想像力か」

「これも雄揮の方が、かなり高いね」

他も見だが基準値を大幅に越えている。
これが

シークレットコードの力なら怖いぐらいだ。

「あれ？これは……」

「なになに？」

雄揮が顔をしかめると、観佳が覗き込んだ。

「て……れ……ぼ……と。て、テレポート!!?」

忌まわしき時間へ

「テレポートってあの!？」

「ああ。いわゆる瞬間移動だ。だけど何処へ飛ばされるか分からない」

「危険？」

「分からない。起動してみようか」

雄揮は【テレポート】を選ぶ。

すると、場所の候補がリストアップされた。

外国まである。

「ん?.....これって.....」

「どうしたの?」

雄揮はリストとにらめっこする。

このリスト……どこかで見たような……。

しかもつい最近だ。

「これ……あの事件があった場所ばかりじゃない！」

「あの事件……」

雄揮はハツとなり、再びリストを見る。

そうか。

このリストは崩壊してニュースに出てた場所なんだ。

「ってことは……」

雄揮はある事を思い付き、リストをタッチした。

すると今度は時間が表示される。

時間を選んで飛べるようだ。

「やっぱりな。これは緊急時のプログラムだったか」

だから武器も最大まで強化出来る。

加えて様々な最強能力も。

バグにはおかしいと思っていた、雄揮の力は当たったのだ。

「それでどうするの？」

「決まってるだろ？行くんだよ。この路地裏へな！」

雄揮が指した、路地裏の映像はかなり前に少年が2人消えた場所だった。

雄揮は観佳に手を差し出し、

「一緒に行こう、観佳」

笑いかけた。

観佳は頷き、はにかんだ笑顔を浮かべる。

2人は手をギュッと握り、雄揮はテレポートする時間を選んだ。

「テレポート！！」

パシュッ！

テレポートした先に

「痛いっ！」

ドスンと雄揮は尻餅をついた。

「雄揮……」

雄揮は真下を見る。

「わ、悪い観佳」

「重いから退いて……」

雄揮は観佳の上に座っていた。

唸るように声を出し、観佳は懇願する。

「ふう……ヒドイ目にあつたよ」

涙目になりながらスカートの裾を払う。

「わ、悪いな。まさか下敷きになってたなんて気付かなくてさ」

どうやらテレポートの際に雄揮が後になってしまったらしい。

不本意ながらも雄揮は謝っていた。

「ところで、ここどこだ？」

見た感じ、路地裏っぽいが、どうも見覚えがある気がする。

目の前には崩れた廃墟ビル。

左右には大通りに抜ける通路になっていた。

「あ……！私分かったよ！」

「本当か？」

観佳は頷く。

「ここって少年2人が行方不明になった場所だよ。ほら、目の前に廃墟ビルだし、左右は大通りじゃない」

観佳に説明され、雄揮は頷いた。

道理で見覚えがあるはずだ。

つい最近有名になった失踪事件の現場なのだから。

「あれ？ちよつと待てよ。あれってゲームが原因——」

雄揮は思い出す。

もしここがああの現場ならモンスターがいた筈だ。

だけどモンスターの反応は『P S A S』にでていない。

「間違いないよ。私のP S A Sは反応してるもの」

とそこへ——

「……当たり、だな」

黒い影が大通りに見えていた……。

雄揮の前に現れたのは

雄揮は周囲を警戒すると、観佳に指示を出した。

「観佳、ここの敵、解るか？」

「大丈夫！えーとね……『赤眼のベルズ』属性は悪魔だよ」

「上出来！」

雄揮はニヤリと笑い、観佳の頭を撫でた。

「いいか？ここからは作戦で戦う。行くぞ！」

「OK！任してよ！」

雄揮と観佳は背中合わせに駆け出し、大通りへの寸前で影に隠れる。

そして合図として大きく手を振り、位置に着いたと知らせ合った。

「今だ！」

同時に動く2人。
だが敵はいなかった。

「ちっ……ハズレかよ！」

雄揮は舌打ちして小石を蹴飛ばす。

そういえば観佳の方は？

慌てて雄揮は観佳の元に向かう。

反対側にはいなかったが、観佳の方にいたかもしれない。

雄揮は先程と同じ行動を取ると、剣を握った。

「観佳！」

大通りに飛び出した雄揮は信じがたい光景を目の当たりにした。

「な……なんだよ？これは……」

敵の姿はない。

だが変わりに巨大な白い繭が2、3個ほど大通りに横たわっていた。

その大きさは雄揮より4倍ぐらいの大きさだ。

雄揮は繭に近付き、1番近くにあった繭に触れようとした。

だが――

グオオオオ――ンンン！！

大地を揺るがす雄叫びに嫌がおうでも雄揮は反応してしまう。

いる。近くに敵が！

観佳の話では悪魔と聞いている。

悪魔。

未知の敵だが、観佳の所在が分からない今、やれるだけやるしかない。

雄揮は繭の裏に隠れ、声が聞こえた方向を向く。

「いつでも来い！」

この時、雄揮の真上に巨大な影があつた事を繭の裏に隠れた雄揮には分からなかった。

見えない敵

気の乱れが一気に形勢を逆転してしまう。

雄揮も観佳もそれは嫌という程、痛感している。

左右を最大限に警戒し、繭を背に、気配を伺う。

すると、下がり過ぎたのか、巨大な繭に軽くぶつかってしまった。

「おっと」

ゴロンと転がった繭は軽いらしく、すぐに動いてしまう。

雄揮が触つてみると、繭は綿で出来ているみたいだ。
だが、この繭は魔物の物なのか判断出来ない。

中身は一切見えなく、中に何がいるのか不明だ。

すぐさま、繭から気を反らし、再び左右を伺う。

動作を繰り返していると、ふいに気付いた。

「まてよ……」

今までは地上だったが、敵はどこから来るか解らない。

地面から来るかもしれないのだ。

雄揮は地面に目を落とすと、異変に気付いた。

「な……なんだこの影は!？」

眼下に広がる巨大な影は繭より大きく、雄揮どころか、繭も簡単に潰せる程の大きさだった。

刹那――

「あぶねえ!」

間一髪、雄揮は地面を蹴り繭から離れた位置に後退った。

雄揮を襲ったのは巨大な真空波だ。

真空波は雄揮から反れ、繭を傷つけることなく、辺りに設置された信号機、標識を無惨に切り刻み、粉微塵に散らばった。

もし直撃されたら、大怪我では済まない。

下手すれば、待っているのは死だ。

しかし、雄揮は飛び散った破片を前に体勢を崩してしまった。

体勢を戻す間もなく、襲い掛かる第二波。

「くそッ！」

雄揮は身体をひねった反動で自分の体勢を整え、自分の剣を盾に、真空波を防いだ、かのように見えた。

だが真空波の威力は予想以上に凄まじいもので、防いだ体勢のまま、雄揮は遙か1キロ離れた繭に全身を激突させてしまった。

「がはっ！」

飛び散る鮮血、広がる痛みに剣を握れなくなり、雄揮は地面に崩れ落ちた。

そして最大のミスに気付く。

敵の姿を見ていなかったのだ。

終われない！

こんな所で終わるのか？

いや、仕方ないのかもしれない。

自分が相手にするには敵が強すぎる。

たった一撃、しかも防いだはずなのにこのザマだ。

雄揮はゆっくりと瞼を塞いだ。

これで終わるかと思うと悔しいが。

「悔し……い？」

そんなバカなことが？

今、自分は諦めて目を塞いだ。

それなのに、今更悔しいと思える自分が不思議だった。

なら、ここで倒れている自分は誰だ？

雄揮は自問自答を繰り返し、答えを掴もうとしていた。

目を閉じて浮かぶのは恋人の泣き顔。

なぜ——泣いているんだ？俺が守れなかったからか？

雄揮は幻影の観佳に手を伸ばした途端、観佳は笑顔で胸の辺りでガッツポーズをしていた。

——ガンバレ！

雄揮はそう聞こえた。

あの泣き虫の観佳が涙を讃えて、自分を応援している。

それなのに自分の姿はなんだ！？

「まだ……諦められないよな？」

そうだろう？観佳——？

ここで倒れて眠れば、待つのは死だけだ！

倒れてる場合ではない！

雄揮は痛みの走る右腕を押さえ、剣を強く握りしめた。

「感謝するぜ観佳！」

剣を握る右手を開いたり、閉じたりしてみる。

多少の違和感はあるが、戦えない程ではない。

雄揮は剣を握り、遥か上空にいる敵を睨み付け、叫んだ。

「伸びろ！！」

叫んだ瞬間、地表から空に伸びる柱は地上から離れた位置に鎮座する鉄塔よりも伸び、想像を絶する高さに伸びた。

ここにいるはずだ！

雄揮はくまなく視線を張り巡らし、敵の姿を確認しようとした。

「雄揮！」

耳の奥底まで響く声。

何度も聞き慣れた、恋人の声だ。

「どこだ!？」

上空の行動劇

上空4000メートル。

白い雲も手を伸ばせば届く位置に、突如聞こえた観佳の肉声。

雄揮は叫んでみたが、辺りにそれらしい気配はない。

幻聴に違いない！

この高さに来る術を観佳は持ち合わせていないはずだ。

しかも距離からして、離れた位置にはいない。

幻聴と間違える自分に雄揮は不安を覚える。

先程から気にしないようにしていたが、観佳の所在は未だ特定不可を現しているのだ。

P R A Sは極めて高性能なため、人口A Iで修復は自分から行う。

壊れてしまうのは、全くと言っていいほどあり得ないのだ。

それに、上空の風圧で飛ばされそうになっているのに、P R A Sに負傷した様子はない。

さすが次世代高性能AI搭載だけあって、かなり頑丈だ。

「雄揮——！！！」

また聞こえた。

しかも距離は先程より遥かに近い！

近距離にいるのだろうか？

しかし、どうやったら上空に来れるのか不明だ。

「逃げて——！！！」

やはり幻聴ではなかった！

観佳は何やら黒い物体に乗り、真っ直ぐ雄揮に向かって飛んでいたのだ。

「観佳！？！」

「早く逃げて——！！！」

激突まで、もう時間はない。

雄揮は祈るように黒い物体を待ち受けた。

真っ向から受ける気だ！

観佳は信じがたい物を見るように、目を見開いた。

「行くぞ——！」

雄揮は眼前に観佳を乗せた物体を見据えたまま、剣の鏑を蹴りつけ、垂直に飛び上がった。

そのまま空中できりもみ回転を起こし、風圧によって剣がある位置から離されてしまっていた。

「雄揮——！」

すでに遙か後方にいる、雄揮に向かって必死に観佳は叫んだ。

あのままでは、雄揮は剣を握れない！

恐怖から顔を背けようとした時、観佳はハッとなる。

それは前回、ワイヤーみたいに伸びる白い紐だ。

前に雄揮が言った言葉を思い出す。

素材自体は布と同じらしく、ワイヤーとして機能しない時は矢でも貫けるそうだ。

あれを狙えば――！

観佳は自分の矢に手をかけ、汗で滑りそうな弓を握った。

「く……っ！風圧で狙いが……」

カタカタ揺れる弓矢。

風圧が邪魔して真っ直ぐに狙えない。

考える暇なく、雄揮は落下している。

観佳は唇を噛みしめ、体勢を低く構えた。

タッグプレー

体勢を深く沈め、弓を平行に構えるが風圧によって、どうしてもブレてしまう。

このまま放てば、失速どころか、飛ぶ方向すら解らない。

どうすればいい！？

このままでは、間違いなく雄揮は地面に激突してしまう。

だが――悩めば悩むだけ、時間は経過する。

「あつちに向かいなさい！」

観佳は黒い物体の上で暴れ、物体は頭を雄揮の方向に向けると、空中で大きく翼を広げた。

そのまま観佳を落とさないように、雄揮に向かって加速を始めたではないか。

「よし！」

後は雄揮の剣に矢を打ち込み、それに……。

しかし観佳の言葉が止まった。

矢を打ち込み……どうする？

あんな布に矢を放って、どうしようとしているのか、観佳自身も不明になってきた。

しかし頭に湧くイメージでは貫いた矢を雄揮に握ってもらい、助かるといふ単純な図柄が出来上がってしまう。

——そんな簡単に上手く行くはずはない。

なのに、どうしてかその行動を止められないのだ。

観佳は覚悟を決めて、急接近する。

矢を口に加え、再度弓を握った。

「観佳!？」

「話かけないで!」

もう2人の距離はほとんどない。

観佳は片目を閉じ、弓に矢を装着する。

キリキリと弓が絞られ、思いを全て矢に託す。

これで外れたら、雄揮は助からない。

観佳は願いを込めて叫んだ。

「当たって——！！」

放たれた矢は強風にも負けず、一直線に布に向かって飛ぶ。

そのままを維持し、矢は布を貫いたまま、引っ掛かった。

「ナイスショット！」

雄揮は確認するや否や、矢を掴み、素早く白い布を手巻き付けた。

何をする気だろうかと観佳が見つめる中、雄揮は自分の剣に向かって命令を下した。

「変化！ワイヤー！」

風にはためていた白い布は、あっという間に頑丈なワイヤーとなり、雄揮を上空に弾き飛ばした。

上空からの滑空

上空に弾き飛ばされた雄揮はきりもみ回転をしたまま、手を伸ばす。そこにあるのは剣の持ち手。

雄揮はきりもみ回転しながらも、がっしり剣を握った。

しかし彼は動きを止めなかった。

今度は剣を軸に逆回転すると、剣を元のサイズに戻したのだ。

自殺行為に等しいが、これには訳がある。

この真下、いや大体の位置だが、巨大な影が見えるのだ。

さっきは遅れをとったが、今回はそうはいかない。

支えを失った雄揮は大気圏突入を敢行するスペースシャトルのように、降下を開始した。

襲い掛かる死の強烈な匂い。

顔面に当たる強風は半端ではなかった。

「雄揮——！」

相変わらず訳の解らない黒い物体に乗った観佳は、高度を下げて、空中を浮遊する。

そんな便利なものがあるなら、始めから欲しかった……。

耳から抜けて行く風は引きちぎらんばかりだ。

痛くて仕方ないのに、観佳は髪を抑えるだけ。

なんとも不公平だ。

そんな不満を抱いていると、奴が見えた。

「下がってる観佳！」

「え……う、うん」

戸惑うように観佳が離れ、雄揮は再び回り始める。

剣を水平に保ち、巨大な大車輪と化した。

「必殺！」

回転が徐々に早くなり、強烈な吐き気が襲う。

さすがに無理があつたようだ。

しかし、この回転は残念ながら止まらない欠点がある。

そうとなれば、やる事は一つだ。

このまま特攻すればいい。

「うおおおおおっ！」

雄揮は剣を飛ばされないように握りしめ、巨大な背中に飛び込んだ。

「必殺！大車輪切り！」

高速回転した雄揮はいとも簡単に敵を真っ二つに切り裂いた。

そのまま怪物の頭に乗し、見事に巨体と共に大地に着地した。

地響きをさせる巨体がアスファルトに地割れを生じ、改めて自分が

切り裂いた獲物に自画自賛してしまう程だ。

「ん？こいつ……まだ？」

怪物は動きを止めるところか、再び動き出した。

遅れて、観佳が雄揮の隣に並ぶ。

「雄揮！」

「観佳！油断するなよ！まだコイツは生きてやがる！」

観佳は息を呑み、矢を取り出すといつでも打てる構えをとった。

未知数の敵

低い唸りを上げて、上半身が唸る。

なんという生命力だろう。

真つ二つにすれば、大抵は息絶えるのが普通なのだが。

奇異な目で敵を見ていると、巨体に変化があつた。

まばゆい発光を四散させ、あたりを白く染め上げていく。

失明してもおかしくないぐらい、光は強く、目を開けていられない。

やがて光が次第に消えていくのを雄揮は見た。

「……………」

先程までは敵の姿は巨体だった。

それも真つ二つに切った、暴れる巨体だったのだ。

しかし、光が収まった瞬間、雄揮は言葉を失ってしまふ。

ただ解るのは、こちらが本体なのだという事だ。

「ちよつとばかり、強そうだな……」

雄揮は動悸を抑え、なんとか敵を睨む。

身体も大分、小さくなったがまがましい気配は先程とは比べものにならない。

巨大な羽、耳まで裂けた真つ赤な口に生える牙。

爪は、鉄すら簡単に、バターを裂くような程に鋭く、おぞましい型だ。

ギリリと光る、白い爪は脅威としか思えない。

人間以上の背丈なのに、おぞましい爪先は整い、地面に突き刺さっていた。

あの魔法使いと戦った時も背筋に寒気を感じたが、これはある意味、危険だ。

だが逃げた所で敵は追ってくる可能性を思つと、引き下がる訳にはいかない。

「やるしかないか……！」

観佳は震える身体を覆うように、雄揮にすがった。

観佳は怯えている。

確かにこんな相手がいたら、怯えて当然だろう。

やらなければやられる。

雄揮は剣を持ち直し、切っ先を敵に向ける。

相手の動きを予測し、回避策を組み立てた。

しかしどうしても完璧にはできない。

右腕が迫れば、観佳をかばいつつ、下がればいい。

しかし突進されたら――？

いや、空を飛ばれてもマズイ。

対空技でもあればいいが、そんな高等技術を雄揮は持ち合わせていないのだ。

ピンと張り詰める空気が息苦しさを駆り立てる。

額に浮かぶ汗は、とめどなく流れ落ち、力を抜けば、剣を落としかねない。

雄揮は息を呑み、観佳に小声で話す。

「観佳、俺が三数えたら、俺から離れる」

「どうして……？」

説明している暇はない。

これは一か八かの賭けだ。

成功すれば、一気に攻めれるが、失敗すれば致命傷は免れない。

我ながら大胆な発想だが、敵が動いていない今、実行に移すしかないのだ。

「いくぞ！」

観佳は「えっ？」と戸惑う声を上げるが、雄揮はカウントを開始した。

「一、二……今だ！」

雄揮は観佳の背中を突飛ばし、更にその反動を利用して敵に奇襲をしかけた。

建物の影に飛ばされた観佳は雄揮の動きを追えない。

不安と動揺が交互に押し寄せてきた。

やがて甲高く響く金属音に慌てて立ち上がった。

建物からそっと覗き、見えたのは恋人が敵に切りかかる姿。

しかし彼の剣は地面を貫く、巨大な長い爪に斬撃を塞がれていた。

そして次の瞬間、時間が止まる。

雄揮に迫る、反対側の爪。

雄揮は全く気付いていない。

——雄揮！！

観佳は叫んだ。

だが彼女も気付いていない。

自分が叫んだつもりでも、声が恐怖心から出せていないことに。

繭の中に

「させるかぁッ！」

雄揮は寸前で気付き、剣を軸に身体を回転させる。

間髪入れず、飛んでくる右腕。

あと少し遅れていれば、間違いなく頭を飛ばされていただろう。

思わず冷や汗が浮かぶが、敵は予想外の反応に対応出来ていない。

雄揮はすかさず距離を置き、近くに転がる繭を盾にした。

標的を失った敵は辺りを見回すが、雄揮の姿はない。

すると、敵は両腕を地面に叩きつけ、反動を利用して空に上がった。

「しまった！」

——まさかあんな方法で上がるなんて……！

雄揮は齒噛みした。

これではこちらの位置はすぐにはれてしまふ。

焦る雄揮に繭が動く。

「誰がいるの？」

聞けば、それは少年の声であつた。

「無事なのか!？」

「まあね。だけど、ちょっと苦しいや」

少年は生きている！

恐らくこの少年は行方不明となつた、少年に違いない。

雄揮は繭に小声で話す。

「下がれるか？」

「うん……なんとか、ね」

繭が動き、前側が軽く浮いた。

あの場所を斬れば——!!

考えるより早く、雄揮は剣で繭を切り飛ばした。

「ふう……。助かったよ……。ありがとう」

少年ははにかんだ笑みを浮かべ、自分の右手に握る杖を確認する。

何もなっていないと解ると、繭から抜け出した。

「君、ひよっとして術師か？」

掲げる杖には赤い宝玉が埋められ、三日月の形をしていた。

調度、三日月の下にはまる赤い宝玉は丸く、三日月が満月に見える。

少年は杖を見上げ、軽そうに答えた。

「うん。ボクは魔法使いだよ。攻撃しか出来ないけどね」

「マジ！？じゃあ頼みがあるんだ」

「頼み？」

「ああ」

「いいよ。他ならぬお兄さんなら。なんてったって恩人だからね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552h/>

リアルXバーチャル

2010年10月11日11時53分発行